INTERVIEW: インタビュー



放送作家

大岩 賞介 さん

放送作家として数々のテレビ番組を手掛けられている大岩賞介さん。45年にわたってテレビ業界の第一線で活躍を続ける大岩さんに、エピソードを交えながら、面白い番組作りへの思いについてお話をうかがいました。

(聞き手・構成:高橋 辰三, 小峯 健介)

―― 放送作家になるきっかけは何だったのでしょうか。

働いていた外車の代理店が潰れるという噂があり、 とにかくふらつきたいという気持ちがあり、正業に就 かずにいると、たまたま親友から「ちょっと運転手の アルバイトをやってくれ」と電話がかかってきた。3カ月 ぐらいで代わりの人間が来るまでの間のつなぎという 軽い話でした。「だったらいいよ」と言って、行った先 が、この間亡くなった、はかま満緒さんでした。

--- 弟子入りみたいな感じでしょうか。

僕は全然そんな気もないし、あんまり興味もなかったけれど、向こうは勝手に弟子入りに新人が来たと思っていた。行ったら、「いろいろ大変だけどよろしく頼むわ」と言われて、その次の日から運転手をやることになりました。

―― はかま満緒さんは、どのようなテレビ番組を作られていたのでしょうか。

正直言って僕が行ったころには、ほぼ100%と言っていいほどタレントでした。

はかまさんの下で運転手をしたのはおいくつですか。21、22歳ぐらいのときかな。

―― 運転手から放送作家的な活動をしていく流れという のは?

3カ月たっても、はかま先生は何も言わない。次の方が来るとも何とも。3カ月と聞いているのですが後任が来ない。「そのうち来るから、来るまでちょっと頼むわ、お前も暇だろう」みたいなことを言うわけです。それで、3カ月が半年になり、はかま先生のお宅に毎日行くうちに、僕にとって心地がよく、奥さんも非常に面倒見のいい方で、やっていくうちに1年ぐらい経っちゃったんです。

ラジオ局各局に一緒に付いて回るものだから、周りは、「はかまちゃんのお弟子さんね」みたいな目で見て。 僕は弟子という感覚がまったくないし、だいたいそんな勉強もしてない。そういう環境の中にいたときに、ニッポン放送のディレクターが、「大岩君、そろそろ書けるんじゃないか」、「お前、はかまさんに付いていて書けないわけがないだろう」みたいなことを言ってきました。それで、当時はディスクジョッキーってフリートークはそんなになく、台本があったのですが、「これ台本だから、こんな感じで書いてくれればいいから」と言われたんです、いきなり。

―― それが最初に担当したラジオ番組になるのですね。

4人のジョッキーが10分ずつリレーで話していくという40分のラジオ番組。

―― 最初にラジオの番組の台本を書いて評判はどうでしたか。

ディレクターは、「ああ、よかったよ」と言うだけの話。タレントさんから直接聞いたこともないですね。 僕自身がいいんだか悪いんだかよく分からない。ただ書き殴って、「どうですか」と言ったら、ちょこちょこと赤ペンを入れられて、「こんな感じかな」というので、そう苦労もせずにそのまま放送されたりなんかしていました。

―― 最初にテレビ番組で声を掛けられたのは?

師匠のはかま先生が出演していた『シャボン玉ホリデー』という、10年ぐらい続いた日本テレビのバラエティーです。そのうち付いていって、秋元さんという名ディレクターから「見てないでコントの1つも書け」みたいなことを言われました。

--- どういう方が出演されていたのでしょうか。

クレージーキャッツです。ハナ肇さんとか、植木等 さんとかの。ザ・ピーナッツと。ザ・タイガースとか、 布施明とか。

――当時、一番面白いと憧れていたテレビスターはどなたですか。

やっぱり青島幸男さんかな。青島さんだったり, 植木等さんだったり。

--- 萩本欽一さんとの出会いはいつ頃だったのでしょうか。

『シャボン玉』がもう終わりに近づくころに、コント55号というのが彗星のごとく現れた。萩本さんが、僕の師匠のはかま満緒さんのところに、限りなく弟子に近い存在として出入りしていたんです。

当時のコント55号というのは爆発的な人気で、はかま先生から「欽ちゃんに会いたいんだったらいつでも俺が会わせてやるから」みたいなことを言われたので、僕は「ぜひ会いたいです」と。そのときに初めて萩本欽一という人を紹介され、「うちで今勉強している大

岩というんだけど、よろしくな」と紹介されました。 それで開口一番、萩本さんからは、「はかま先生のところに長くいちゃいけないよ」と言われたんです。「いいところ1年半、それ以上いるとだめになっちゃうから」。 たぶん、しゃれだと思うんですが、僕は、そういうものなんだと真に受けたんですね。

運転手をやっている間にちょこちょこ仕事が来て, はかま先生を待っている間,車の中で原稿を書くという生活があったんです。そのうちにはかま先生が,「お前そろそろ独立してもいいんじゃないか」みたいなことを言われ,萩本さんにも言われていたので,渡りに船みたいな感じでした。

--- 独立されたのはおいくつですか。

24歳だと思いますね。いろいろなものを書いていたりしていて、一丁前にいよいよ独り立ちだと思っていたんです。非常にばかな話ですが、番組ってずっと続くものだと勝手に思っていたわけです。でも当時は野球最優先の時代だったので、野球のシーズンが始まるとラジオもテレビも番組が飛んじゃう。年の暮れに独立して、いい正月を迎えて、「これから忙しくなるぞ。さあ、春から新番組をどうしようか」と言っている間に全部終わってしまった。

―― その間は、どうされていたのですか。

営業的なことをしたけれども、もう先輩たちのそう そうたる人々が押さえているわけですよ。プロデューサ ーの方から紹介してもらって、ラジオ番組1本で食い つないだという時期が1年ぐらいありました。

--- 1年後に来た仕事というのは何でしょうか。

コント55号だと思いますね。というのは、僕が大将 (萩本さん)と会った時に紹介してもらったコント55 号の台本を書いているほぼ専属の作家がいたんです。 岩城未知男さんという、もう天才的なライターです。 かなりの粋人で、しゃれっぽい人だったので、仕事も しゃれでやっているみたいなところがありました。締め 切りに間に合わないというのがしょっちゅうあって、そ の代わりに、「大岩君、ちょっとやっといて」みたい なことを言われて、見よう見まねでやっていた時期が あった。僕の笑いとかコント作りの基礎を作ってくれ た人は岩城さんです。

―― 台本作りのイメージやネタはどうやって得ているので しょうか。

誰でも発想はできるんですけれども、発想量はタカが知れているんです、個人のキャパって、天才じゃない限り。だから発想を助けてくれる何かが必要になってくる。発想のヒントになるというのはやっぱり萩本欽一さん。ホン(台本)の上では、岩城未知男さんと萩本欽一さんの発想力ということで成り立っている。

―― タレントというエンターテイナーから引き出して, そこから膨らませるという感じでしょうか。

引き出すというか、勝手に学ぶということでしょうね。 もちろん教えてもらうことは多々あります。2人とも教 え上手です。萩本欽一さんは、哲学者でもあり、教育 者だと思います。実によく分かる教え方をしてくれる。

--- プライベートでのお付き合いがあったのでしょうか。

プライベートも何も一緒に住んでいるに近いです。 「パジャマ党」には、僕とか、何だか分からないような 連中とか、ADをやっているのが2人ぐらいいました。 飯まで食わせてもらって、あわよくば仕事のおこぼれ もいただいて、何とか日々楽しく食えちゃうみたいなと ころがありました。ほかの3人は本当に合宿みたいに 大将の家に住んでいました。古くはトキワ荘ですよね。 大将からすれば、こんな訳の分からないのがごろごろ いたんじゃしょうがないというので、それで、「そうだ、 こいつらを作家にしてしまおう」と思ったんですね。

――「パジャマ党」と名付けたのは萩本さんですか。

そうそう。大将は仕事から帰ってくると、すぐパジャマに着替えるんです。我々は着の身着のままとはいえ、一応服を着たりしているわけですよ。このリラックスの差がやっぱり勝利につながるというふうに勝手に思って、それでパジャマ党と名付けたそうです。

――明石家さんまさんとの出会いは?

さんまちゃんとの出会いは『オレたちひょうきん族』。

そこの総合演出をやっている三宅恵介というディレクターは、僕が大将と仕事をしているときにADをやっていた。それが一本立ちしていろいろな番組をやっていく中で、『ひょうきん族』というのを作ったんですね。『ひょうきん族』をやっているときに、「僕がまた面白いのを作りたいね」と三宅ちゃんと話をしていたんです。僕は、『裸の銃を持つ男』というアメリカの映画がものすごく面白くて、こういうのをぜひやりたいなと話しました。

--- どのような映画なのでしょうか。

コメディーギャグ映画。シリーズでずっと出ている んです。「じゃあ、誰でやろう」と言ったら、「さんま ちゃんがいいんじゃない」ということで、さんまちゃん と会うことになったんです。『ひょうきん族』のときは、 さんまちゃんとは挨拶もしないので、そこが初めてな んです。

ホン(台本)作りを始めていく中で、君塚良一と僕とでホン(台本)を担当していたのが『心はロンリー気持ちは「…」』という毎回ゲストがでる、スペシャル番組のドラマですね。ちゃんとストーリーがあって、もとでいうと、おかしな警部がいて、それが単に悪党を退治するというだけのシンプルな話だけれども、随所に細かいギャグが入っているわけです。

--- 一番思い入れがある番組は何でしょうか。

『ひょうきん族』です。その前でいうと『欽ドン!』, この2つでしょうね。

―― 素人にはぴんとこないのですが、放送作家さんのお 仕事というのは、どんなことをされているのでしょうか。

昔と違っているんです。昔の、永六輔さんとか青島 幸男さんとか大橋巨泉さんとかいう放送作家という肩 書を世に知らしめた人たちの時代は、番組においての 台本もさることながら、企画ということから番組によっては演出に至るまで、やっぱりトータルで番組を作っていくということでした。だからまさに、放送にかかわる作家ということだったと思うんです。

その流れがずっと来ているんだけど、この15年ぐらいから、だんだんその形がいろいろな意味で変わって

INTERVIEW: インタビュー

きた。放送作家という存在とか仕事の内容がずいぶん変わってきているんですね。台本は台詞が非常に重要だったものが、この15年はそういうことはあんまり必要じゃなくなってきたんです。

ひな壇芸人といわれ、フリーで話すことのほうがよいという風潮になってきた。だから今の放送作家という人は、台詞がある台本を書くということはほとんどないし、あっても何か進行台本といわれるような、どっちかというとスタッフが進行するために便利なようなものがほとんどです。

── 例えば, 『踊る!さんま御殿!!』 とかでしょうか。

そうです。メインの司会者をタレントさんがやるとしたら、必ずと言っていいほどサブの進行役に局アナが付いている。その人のために書いているものが多いです。それがいいの悪いのということじゃなくて、時代だと思うんですが、じゃあ、今度は何が大事かというと企画力になるんですね。番組そのもののフォーマットをどうするかということにより重きを置いていくので、企画力が重要になってくると思うんですね。

—— そういった企画力, アイデアは, どうやってわいてくる のでしょうか。

思いじゃないですか。何か面白いことないかなと漠然とは常に思っている。ただ、発想のヒントとなる 糸口は作家によって違うと思いますけどね。もちろん いい映画を見るとか音楽を聴くということはあるかも しれない。

こんな感じのバラエティーを作りたいと提示された ときに、他の人がもしそういうお題をもらったならば、 こんなことを考えるんじゃないかとまず発想するんで す。仲間が考えそうなことをまずイメージするんです。 それで、それにないものを考える。だからある種、消 去法です。

— 裏を突いていくみたいな感じでしょうか。

そうですね。裏を突いていくということと、それからその中に、僕がいまだに大事にしていることは、やっぱり手塚治虫さんです。僕は手塚治虫さんの漫画はそれほど好きじゃないんですけど、脈々と赤塚不二夫

さんから今日のいろいろなアニメーターに至るまでずっと流れているものがある。その大本は何かというと、 発想の原点にあるのが、とにかく一流なものを見て聞いて食べて触れてというの手塚治虫さんなんです。

それはどういうことかと言うと、今、テレビは、正直言ってあんまり面白くないですよね。面白くないから見られないので、なぜ面白くないかというのを考えてないだけなんです。そんな難しい話じゃない。

話は飛んでしまうけれども、テレビ離れといわれて 久しいのは、作り手がそれだけ怠っているだけ、怠慢 なんです。僕はいつも例に出すんだけれども、例えば 『半沢直樹』のドラマを見るでしょう。

――はい。

なぜ見るかといえば、面白いんです。理屈をこねたりする人もいるけど、単純に面白いかつまらないかなんですよ。だから面白いものを作ればいいのに、面白いものを作れていないだけの話なんです。

それはなぜなのでしょうか。

僕が間違っているかもしれないけど、多くは今のテレビはテレビからテレビを作ろうとしているんです。それは、手塚治虫さんがいろいろとおっしゃっていたことと同じで、あの方は漫画を描くときに、ほかの漫画家さんを参考にしたりはしないですよ。ベートーヴェンを聴いたりゴッホを見たりというようなことで、何かに触発されて、素晴らしい音楽も聴いて、ああ、ブラームスか、いいなと思ったら死ぬほど聴いて、そのイメージの中で何か物を作る。

面白いものって、単に先人が作ったものを真似たってしょうがないです。勉強といえば勉強かもしれない。でもそこには新しいものは出てこないんです。 だから自分がテレビをやるんだったら、違うジャンルのものからテレビという箱に押し入れていかないと、新しいものはできないんです。

プロフィール おおいわ・しょうすけ

東京都出身の放送作家。萩本企画の放送作家集団「パジャマ党」 に所属する。構成を担当した番組は「欽ちゃんのドンといってみよう!」をはじめとする欽ドン!シリーズ、「オレたちひょうきん族」、「あっぱれ!さんま大先生!「踊る!さんま御殿!!! など多数。